東京国体視察報告書
佐世保市　徳永修

●東京都薬が行った事
・ドーピング研修会の資料の作成→会員、非会員、登録販売者も含めた研修会の実施のため
・幟（大：屋外、小：レジ横）、ポスター（Ａ４、大きい）、団扇、ポロシャツ（薄紫色）の作成→地域や団体への“うっかりドーピング”防止活動のため
・相談応需体制の確立（システム構築、運用）→ドーピング防止の直接相談のため
・都体育協会との連携→会場ブースの確保のため
・ＪＡＤＡへの協力、企画の連絡

●地区薬剤師会が行った事
・ドーピング研修会の開催→地域で“薬”を扱う人達への意識付けと対応の徹底を目指し
・地区体育協会との連携→会場ブースの確保のため
・会場ブースの準備（ブースを出さない地区もある）→選手及びその関係者へ薬剤師職能のアピールの場として
・アンケートの作成など（地区によって、違う。町田市は横断幕も独自で作成していた）→ドーピングに関する知識の啓発活動として

●ＪＡＤＡへの協力
・“アウトリーチ・プログラム”には、スポーツファーマシスト（ＳＦ）３０名程度の募集があった（思ったより少ない人数)。しかし、ＪＡＤＡ主催の座学の研修２回、実地研修１回を受けなければいけない。
・“アウトリーチ・プログラム”ＪＡＤＡブースに、２名程度配置あり、試合期間中、ＪＡＤＡが実施している間は、協力しなければいけない。
・“アウトリーチ・プログラム”では、“ドーピングクイズ”と“意識調査のアンケート”があり、これらに答える事で、ドーピング防止の啓発を行っていた。お土産は、カンバッチ、リーフレット、団扇など。
・薬剤師会独自の啓発活動に関しては、ＪＡＤＡに承諾を得る必要がある→詳細は不明だが、連絡しないとＪＡＤＡが文句を言うらしい。

●感想
・ＪＡＤＡと都薬の関係は、悪かった→ＪＡＤＡからの、制約が多いため？
・当初、国体準備委員会は、ＪＡＤＡの“アウトリーチ・プログラム”に協力する事が一つの目的と考えていたが、“アウトリーチ・プログラム”に関して、ＳＦの存在が必須ではなく、ＪＡＤＡ職員でも、十分やっていけるのではないかという印象があった。もちろん、ＪＡＤＡの職員も、その場所には１名程度しかいないので、交代要員は必要だと思うが、必ずしも、ＳＦである必要はなさそうだった。
・地区薬剤師会が、独自に“うっかりドーピング”防止の啓発活動を行っていたのが新鮮だった。薬剤師の職能が国体でも発揮できる事の証明である。ＪＡＤＡの言うドーピング防止は、取りも直さず、薬

物乱用防止である。しかし、ブースを出すまでには、体育協会、ＪＡＤＡに許可を取る必要もあり、大変だった模様。
・２４時間相談応需体制の仕組みは、１７名のメンバーで、休日、夜間の相談をメールで対応するシステム。正、副、２名体制で、質問は、正が回答する。送信する前に、副と相談し、意見の相違がないかの確認を行う。質問や回答は、同時に１７名のメンバーにも送信される。
スマホの普及とともに、メールが中心になってきているとの事。２次元バーコード（ポスターにも掲載）で連絡先を読み込ませる方式も、簡単に連絡が取れる工夫だと思う。気軽に聞けるのは、とてもよいと思う。薬剤師が担うべき一つの分野だと思う。ＳＦである必要はない。
・地区薬剤師会ブースでの啓発活動は、最後の花火である。それまでの、薬を扱う人達（会員、非会員、登録販売業者、薬局、薬店、ドラッグストアーを問わず）へ、ドーピング防止に関する情報を、いかに周知徹底できるかが重要で、それが上手くいかないと、選手が可哀想な結末を招く事になる。

●今後の検討事項
・研修会の資料の作成は？ガイドブックを利用して行う予定の様ですが、パワーポイントの作成は？
・会員以外への周知徹底は？
・選手や競技団体、体育協会へのドーピング防止のアプローチはどうするのか？
・２４時間相談応需体制の整備と宣伝広告は？ホームページへの掲載は？
・リーフレット、ポスターなどの作成は？「お薬安心カード」（棚に貼るやつ）などの作成は？
・仮に、地区薬剤師会が東京の様に、啓発用のブースを出すとしたら、県の委員会は後押ししてくれるのか？
・各地区との情報の共有をどうするのか？

以上